

西方遠隔地（三重県伊勢，長野県下伊那）で書かれた 1707年富士山宝永噴火の目撃記録

静岡大学教育学部総合科学教室* 小山真人・小川聡美

大谷大学大学院文学研究科** 西山昭仁

Historical documents written in distant areas to the west of Mt.Fuji and describing
eruptive phenomena of the 1707 Hoei eruption of Fuji Volcano, Japan

Masato KOYAMA and Satomi OGAWA

Department of Integrated Sciences and Technology, Faculty of Education,
Shizuoka University, 836 Oya, Suruga-ku, Shizuoka 422-8529, Japan

Akihito NISHIYAMA

Graduate School of Literature, Otani University
Koyama Kamifusa-cho, Kita-ku, Kyoto 603-8143, Japan

We introduce and briefly discuss the contents of four historical documents, which describe the A.D.1707 Hoei eruption of Fuji Volcano. The documents are “*Geku Korakan Nikki*” and “*Kurodo Nikki*”, which were written at Ise, Mie Prefecture, and “*Ojishin no Ki*” and “*Hoei-Yonen Saichu Gyoji*”, which were written at Shimo-Ina, Nagano Prefecture. The Shimo-Ina area is located 85 km to the west of Fuji Volcano and the documents contain detailed descriptions of temporal change in height of the eruption column. The Ise area is located 200km to the southwest of the volcano and the documents have no *in situ* description by eyewitnesses but contain detailed reports by tourists, who passed near Fuji Volcano during the eruption.

Key words: historical document, Ise, Shimo-Ina, 1707 Hoei Eruption, Fuji Volcano

§ 1. はじめに

富士山の宝永噴火は、宝永四年十一月二十三日（1707年12月16日）から16日間に及んだ、火山礫・火山灰放出を主とする大規模かつ激しい噴火だった。筆者らは、噴火の規模・特徴・メカニズムを探るとともにハザードマップや被害想定を検討に資するため、宝永噴火の詳細な推移復元を試みている（小山，2002a, b, 2006a, b；林・小山，2002；宮地・小山，2007）。また、その一環として、富士山東方の降灰域内における宝永噴火の詳細な目撃記録である『伊東志摩守日記』（小山・他，2001），ならびに『伊能景利日記』（小山・他，2003）を翻刻し、その素性・内容を検討した。

今回は、富士山から西方に距離を置いた遠隔地からの目撃記録のうち、三重県伊勢（図1の地点

1）と長野県下伊那地方（地点3）で書かれた良質の史料を収集・翻刻した。

宝永噴火の噴煙は真冬の強い偏西風によって東方に流されたため（図1），関東地方の記録からは降灰の状況がよくわかる一方で、噴煙柱の高さやその時間変化などの状況は把握しにくい。また、富士山麓の記録からは被害の大きさや住民の心理がわかる一方で、やはり噴火の全体像はつかみにくい。

その点、ここで扱う西方遠隔地の記録には、噴煙柱の観察記録や地震・空振・鳴動の体感記録があり、噴火の物理像を描く上で興味深いデータを提供している。また、噴火中に富士山麓の東海道を通過した者の体験談が含まれる場合もあり、地元史料の乏しい山麓地域の状況がわかる点も貴重

* 〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836 電子メール：mkoyama@ed.shizuoka.ac.jp

** 〒603-8143 京都市北区小山上総町 電子メール：HZW00103@nifty.ne.jp

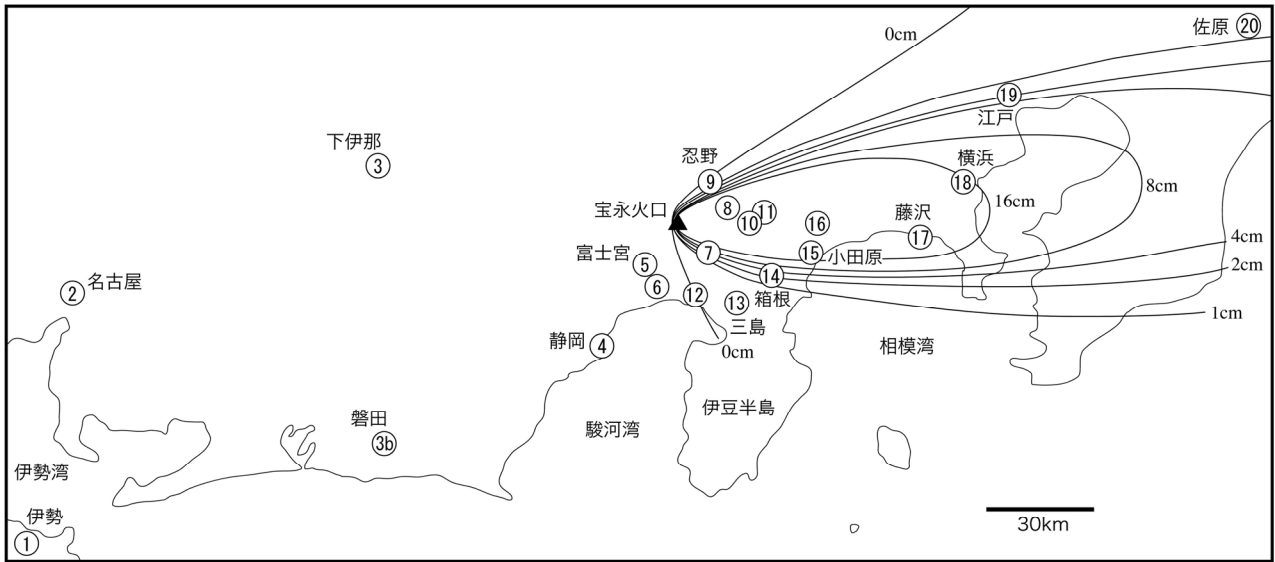


図1 宝永噴火の推移を記録した史料が書かれた地点の索引地図。数字が地点番号で、小山（2006a）の地点番号に対応する。本論で扱った史料は、地点1（伊勢）と地点3（下伊那）のもの。宝永火口的位置（▲）と火山灰の等層厚線（富士山ハザードマップ検討委員会，2004）の主要なものも示した。ただし，0cm線の南端の位置は，地点12（沼津市原）の史料記述（小山，2006a）をもとに修正した。

である。

なお，本論は翻刻した日記本文の収録とその簡単な解説を目的としたものであり，日記の記述内容を他史料と照らし合わせた上での宝永噴火全体の推移復元については，小山（2006a, b）や別途準備中の論文を参照してほしい。

§ 2. 史料の解題

本論で取り上げる史料は、『大地震之記』、『宝永四年歳中行事』、『外宮子良館日記』、『蔵人日記』の4点である。いずれも，その記述内容から判断して，体験者自身あるいは体験者から直接伝え聞いた者が記した記録と考えられる。

『大地震之記』は，現長野県下伊那郡下條村の鎮西家（京都大学名誉教授の鎮西清高氏の実家）に伝えられた記録である。

『宝永四年歳中行事』は，新収日本地震史料（以下，新収史料）によれば，信濃国市田村（現長野県下伊那郡高森町）の庄屋であった上原彦右衛門による記録であり，飯田市立図書館に『村沢文書』中の1史料として所蔵されている。

『外宮子良館日記』は，伊勢神宮に伝わる日記であり，国書総目録によれば康暦二年（1380）から明治二年（1869）に至る231冊が伊勢市の神宮文庫に所蔵されている。

以上3史料については，新収史料の編纂時に使用された紙焼き版が東京大学地震研究所都司嘉直

研究室に保管されていたため，そこから新たに翻刻をおこなった。

一方，『蔵人日記』については，新収史料に収録されたものは，「熊野地震史料」（地震第1輯16巻）から再録されたものであるため，今回は神宮文庫に保管されている原文（『浦田家旧蔵資料』1門17310 347 日記 宝永四年七月 浦田蔵人著）を入手して新たに翻刻した。

なお，以上4史料の新収史料における収録ページは，『大地震之記』（p.100-101），『宝永四年歳中行事』（p.98），『外宮子良館日記』（p.281-283），『蔵人日記』（p.303-306）（いずれも第三巻別巻）である。

§ 3. 富士山宝永噴火の記述

『大地震之記』、『宝永四年歳中行事』、『外宮子良館日記』、『蔵人日記』の4史料について宝永噴火関連部分の全文を翻刻したものを，末尾の史料1～4に示す。

これらの史料がもつ火山学および防災学的な価値は，以下の3点である。

(1) 下伊那の2史料には噴火開始日の前日から前兆地震とおぼしき地震記録が複数あり，他地域のものと比較・同定することによって，個々の地震の震度分布が推定可能である。また，両史料には規模の大きな鳴動・空振が感じられた日付と時刻の記述もあり，噴火の消長の推定材料ともなる。

(2) 『大地震之記』には、噴火初日と二日目の噴煙柱の目撃記録があり、とくに初日の噴煙柱高度が夕方前にいったん低下したことがわかる。他地域の史料や噴火堆積物と比較することにより、噴火初日昼の激しい軽石噴火の後、スコリア噴火に移行する日没前に短い小康状態があったと推定できる。さらに、噴火期間の末期に再度噴火が激しくなったことを裏づける記述もある。

(3) 伊勢の2史料には、神宮使の一行が江戸から伊勢に戻る途中の東海道で宝永噴火に遭遇した体験談が含まれている。激しい降灰によってなかばゴーストタウンと化した小田原の状況描写、箱根・三島などでの降灰状況と夜間に火口から立ち上る火柱や火山弾飛散の描写、噴火期間中の最大規模の地震の体験談などがあり、貴重である。

これらの記述の例として、とくに噴煙柱の目撃記録、ならびに東海道を通過した人々の噴火目撃談について以下に紹介するとともに、若干の解釈をおこなう。

3.1 噴煙柱の目撃記録

『大地震之記』による噴火初日の噴煙柱目撃記録と、初日夕方の噴煙高度の一時的低下がわかる記述を以下に示す。

「同日（十一月二十三日）九つ時分（正午頃）ニ東之方ニて、天とも知らず、地とも知らず、地迄ひゞく心ろニてなり渡り申し候えども、是ハ又地震かところへ人々飛び出し、東の方を見候えども、せい天ニて世上雲見へ申さず候ニ、むらさき色なる雲少シ出、其の中ヨリ色しろきくもの様ニハ見へて、よく見れば雲とも見へず、右むらさき色なる雲ヨリ三、四間ながく出、浪のやうに見へ、次第ニひゞきつよく候えども、なみのやうなる物もむらさき色成る雲も段々大ニ見へ申し候。」

上は、日時と方角から考えて、明らかに噴火開始当初に富士山上空に立ち上った噴煙の目撃記録である。初めて見る大規模な噴煙柱をどう描写したらよいか、著者が苦心している様子がよくわかる。また、噴煙目撃に先立つ空振の記述「天とも知らず、地とも知らず、地迄ひゞく心ろニてなり渡り」もあり、爆発的噴火にともなう空振が下伊那（宝永火口の西北西85km。図1の地点3）に達していたことがわかる。

「追付ひゞきも少しずつ止み申すニ応じて、雲も浪のやうなる物もちりもせず、初めの方へ暮れ時迄ニ

引き込み申し候えども、ひゞきも透と御座無く候。」

上は、空振が沈静化してくるとともに、夕暮れまでに噴煙高度も低下して見えなくなったことがわかる貴重な記述である。噴煙高度の低下後は空振もおさまったことがわかる。これらのことと他地域での記録（小山，2006a）から、噴火初日の夕方に噴火がいったん小康状態になったことが明らかである。

「又晩の五つ時ニ、初めのごとくひゞき段々つよくなり、少シづゝ間有りてハひゞき、又間有りてハなり出し、地のひゞき身ニ覺へ世間見へ候えども、山杯も働キ申す様ニ見へ候。山ハうごきハ致さず候えども、余りひゞきつよきゆへうごく様ニ存ぜられ候。」

上の記述から、日没後に再び空振が徐々に強くなっていったことがわかる。夜間のため噴煙は目撃されていないが、富士山麓での記録内容（小山，2006a）とあわせて考えると、激しい噴火が再開したことを意味している。

一方、『宝永四年歳中行事』の噴火初日の記述は、

「廿三日 晴天（中略）夜明方ニも地震、四つ時迄三度動、五つ過ヨリ未ノ刻迄、辰ノ方何回ともなく山なり、雷のごとし、何之鳴共定がたく、皆人肝をつぶし候、夜五つ時ヨリ又つよくなり出、夜明迄なり申し候、世人不安心終夜臥表喘也、夜七つヨリ夜明ニいたり鳴止、夜ハ丸雪少つゝふる。」

と簡潔であり、地震と鳴動の記録しかない。

なお、伊勢（図1の地点1）での体験記事としては、『蔵人日記』は噴火期間中の十一月二十三日、二十四日、二十六日、二十八日、十二月七日、八日にそれぞれ地震記事を記すが、『外宮子良館日記』は十一月について「当月之内折々小地震」と記すのみで、これら2史料に伊勢からの噴煙柱の目撃や空振・鳴動に関する記述はみられない。

3.2 東海道沿線の状況

伊勢の2史料で注目すべき記事は、東海道を旅行中に宝永噴火に遭遇した神宮使、度會弘乗と秋岡帯刀の2名の体験談である。この2名は他の者も含む神宮使一行として行動を共にしていたが、両名からの直接伝聞と考えられる記事が『外宮子良館日記』および『蔵人日記』に含まれている。

これらの記事のうち、とくに興味深い藤沢・小田原（十一月二十三～二十四日）、箱根・三島（同

月二十四～二十五日)での体験談について以下に述べる。

(1) 藤沢・小田原

伊勢神宮の神宮使一行は、宝永四年十一月二十三日(1707年12月16日)に小田原へ向かう東海道の途上の藤沢付近(図1の地点17)で宝永噴火の開始に遭遇した。『外宮子良館日記』には、

「藤沢ニ至ル頃震動シ、次第ニ強ク鳴テ石ヲ降ス(其石焼テ甚軽シ)。茶店ニ入テ暫ク窺見ニ、往還ノ旅人其辺ノ男女驚キ噪ク事甚シ。」

とある。空振が次第に強くなって軽石が降ってきたとのことである。

藤沢付近は、ちょうど宝永噴火テフラの分布軸上にあり、噴火当初に降った軽石の粒径も大きいことが予想される。砂や灰ではなく「石」が降ったという記述は、まさにそのことを裏付けている。また、東海道を行き来する人々の混乱ぶりも描かれている。

小田原(図1の地点15)での状況については同史料に、

「漸ク小田原ニ着。人民等資材雑具ヲ土蔵穴蔵ニ入テ逃去リ、其家ニ纔ニ一二人ヲ留置ク。震動ノ響ニ戸ハヅレ、灯モ消、電光モ亦甚シ。砂降事五寸許、天明マデ震動不止。此所ニ居テ落着ヲ見申、先へ行テ通レン歟、猶予メ不決、行テハ遁ル方アリト箱根山ニ登ル。」

とあり、『蔵人日記』にも、

「小田原中ニ老人も無之、津波参候とてそう動仕候。其内女老人有之家有之故、大河茂上下共ニ一宿。夜ニ入夥敷光り物家なり仕、其後ハマナニ砂ふり、又石共大分降申候由、漸夜明申候。」

とある。

激しい降灰の続く中、小田原の住民は津波を恐れていたようで、資材・雑具を土蔵や穴蔵に入れてどこかに逃げ去り、各家に1～2人の番人を残していた。強い空振によって戸が外れ、暗闇の中を噴火雷の稲光がひっきりなしに輝く不気味な情景が描かれている。不安の中、眠れなかった神宮使一行は、夜明けまで躊躇した後に、西の箱根をめざして出発した。

小田原は元禄十六年(1703)の元禄関東地震で大きな地震動と津波の被害を受けた。その後、宝永四年(1707)の宝永地震でも津波の被害こそ報告されていないが、地震動による多少の被害を受

けている。そのわずか49日後の宝永噴火開始である。他の史料では、噴火初日から小田原で空振、噴煙による暗闇、噴火雷、降灰が記録されている(小山, 2006a)。それらの初めて経験する異常現象に対して、小田原の人々は津波再来の前兆を感じ、恐怖していたのではないだろうか。

(2) 箱根・三島

小田原を脱出し箱根を登り始めた神宮使の一行は、やがてそれまでの激しい降灰が衰えたことに気づく。『外宮子良館日記』には、

「東西晦冥更ニ咫尺モ不辨山ヲ半腹登リ過レハ天氣清明ナリ然レ共震動ハ不止……」

とあり、『蔵人日記』にも、

「箱根へむけて登上仕候処ニ堂下へ参候へバ、晴天ニ相成……」

とある箇所である。等層厚線図との位置関係(図1)をみてわかるように、これは噴火そのものの勢いが衰えたわけではなく、ちょうど小田原(地点15)から箱根(地点14)に行く間に激しい降灰域から抜けたためである。

同じ日、つまり十一月二十四日(12月17日)のうちに神宮使の一行は、三島(図1の地点13)にたどり着く。『外宮子良館日記』に、

「三島旅店ニ着テ見レハ、富士山(半腹ヨリ上ノ方)ヨリ火出テ、其ノ火ノハバニ里許空中ニ燃上ル。或ハ五六間、或ハ七八間許ノ磐石、火ノ中ニ上ル。焼上ル磐ト下ル磐ト、当テ大ニ鳴テ碎ケ散ル。」

とあり、夕刻以降に宝永火口から立ち上る火柱や、火口から放出された火山弾のリアルな目撃記録が描かれている。

その後、夕暮れ直後と夜半過ぎの2度、大きな地震が三島を襲った。同史料に、

「日暮テ大地震、又子ノ刻許ニ大地震、依之直ニ旅店ヲ出テ、其日駿府ニ至リ宿ス。」

とある。夜半過ぎの大地震の直後に、一行が三島を出発したことがわかる。夜明けを待たずに出発したのは、2度目の大地震に建物倒壊の危険を感じたからであろう。

また、『蔵人日記』には、

「三嶋ニ大ニ人数一宿。夕飯時地震大分震申、門へ出申候。其後も夜ノ四つ頃少し震。夜明前夥敷大地震、余程之家ニ有之候得共、裏かまくづれ申候由。漸罷出、上下共怪我無之由。」

というやや詳しい記述があり、2度目の地震によ

って立派な家屋であっても裏側が崩れたとのことである。

謝 辞

東京大学地震研究所保管史料の閲覧については、都司嘉宣さん、伊藤純一さんのお世話になりました。今村隆正さんには原稿を査読して頂きました。ここに記して感謝いたします。

文 献

富士山ハザードマップ検討委員会，2004，富士山火山防災マップ試作版。http://www.bousai.go.jp/fujisan-kyougikai/fuji_map/index.html
林 豊・小山真人，2002，宝永四年富士山噴火に先立って発生した地震の規模の推定。歴史地震，no. 18，127-132。
小山真人，2002a，史料にもとづく富士山宝永噴火の推移。月刊地球，24，609-616。

小山真人，2002b，富士を知る。集英社，199p。
小山真人，2006a，史料に基づく宝永噴火の前兆と推移。1707 富士山宝永噴火報告書，中央防災会議災害教訓の継承に関する専門委員会，29-56。
小山真人，2006b，噴火に遭遇した各地の人々。1707 富士山宝永噴火報告書，中央防災会議災害教訓の継承に関する専門委員会，64-69。
小山真人・西山昭仁・井上公夫・今村隆正・花岡正明，2001，富士山宝永噴火の推移を記録する良質史料『伊東志摩守日記』。歴史地震，no. 17，80-88。
小山真人・西山昭仁・井上公夫・角谷ひとみ・富田陽子，2003，富士山宝永噴火の降灰域縁辺における状況推移を記録する良質史料『伊能景利日記』と伊能景利採取標本。歴史地震，no. 19，38-46。
宮地直道・小山真人，2007，富士山 1707 年噴火（宝永噴火）についての最近の研究成果。荒牧重雄・藤井敏嗣・中田節也・宮地直道編：富士火山，山梨県環境科学研究所（印刷中）。

史料 1 大地震之記

「大地震之記 享保十三申ノ洪水」

(内題) 寶永四歲丁亥ノ十月四日大地震覺

寶永四年亥ノ十月四日之八つ時二何之方とも不知
白雨之風二聞ルことくひゞき申かと存候処追付事
しづかにゆら／＼とゆり出テ段々とつよき地震
其時人々不殘火をしめし外江立出候得共立
こたゑられず漸々梯柱杯二取付立こたへ見候得共
風通之木二大風之當ことく梯杯もゆり落シ只
一時程ゆり申候所々ゆりわれしを見候得共われ口三
四尺老間程宛ゆりわれ前方水けもなき道
などのわれ口江水ゆり出候所も御座候當村二而も龍
岳寺くり之分不殘つぶれ申候其外之家も戸
かべはなれ五寸老尺程宛かたかり不申家は
希二候飯田二而も家数百五六拾間潰レ申候
其後も日々夜々二間もなく纒之地震ハ同月
廿六日迄ゆり申候扱其以後も五七日二老度程つゝ
ゆり申候又十一月廿二日之晚五つ時分ニ少シつよき地
震致八つ時分ニも又ゆり翌廿三日明方ヨリ五つ
時分迄ニ少々之地震二三度致シ同日九つ時分ニ東之
方ニ而天とも不知地とも不知地迄ひゞく心ろニ而なり
渡り申候得共是ハ又地震かところろへ人々飛出東之方
を見候得共せい天ニ而世上雲見江不申候ニむらさき色
なる雲少シ出其中ヨリ色しろきくも之様ニハ見へて
よく／＼見れハ雲とも不見右むらさき色なる
雲ヨリ三四間なかく出浪之やうに見江次第ニひゞき
つよく候得共なみのやうなる物もむらさき色成
雲も段々大ニ見江申候追付ひゞきも少宛止申ニ応(懸)而
雲も浪之やうなる物もちりもせず初の方江暮
時迄ニ引込申候得共ひゞきも透と無御座候又晚之五つ時ニ
初之ことくひゞき段々つよくなり少シづゝ間有てハ
ひゞき又間有てハなり出地之ひゞき身ニ覺へ世間見
候得共山杯も働ギ申様ニ見へ候山ハうこきハ不致候得共

餘りひゞきつよきゆへうこく様ニ被存候翌廿四日明六つニ
出右ひゞき候方を見候得共四方天ともニはなれ山
珍敷見江申候其山之様成中ニ洞々之有之様ニ見江御日
之出るニ随而かなき山ニ雪之降かゝりたることく見へ候
昼ハ色白ク雲之様ニ見へ候時々姿替り大小ハ切々也翌
廿五日之晩ヨリ其かたニ而一時程づゝ間有てハひかり
つゞいてハひかり申候世間江ばつと光る事も御座候又其
処斗少ひかる事も御座候それヨリ日々夜々前方
之ことくかわらず十二月三日迄見へ候其後も少之
地震ハ折々致し又同月五日之昼時分ニ前度之
やうに少ひゞき日々一度程宛風にひゞき聞申候
則八日之晩ニハ八つ時分ニ強クひゞきわたり戸かゞ
杯もなり扱々珍敷被存候同十日ニハ餘程之
雪降申候右之一通只今迄申傳江にも不承候
故為以後之印置候也
右十月四日ハ午ノ日其後之つよき地震廿二日是も
午ノ日ニ御座候 以上

右光り候ハ富士山やける由年ヲ越へ相知遠国へ焼砂降り候由也

寶永四年

鎮西野村

亥十二月日

清本 (花押)

〔後略〕

史料 2 宝永四年歳中行事

「宝永四年正月ヨリ十二月歳中行事」

〔前略〕

(十月)

- 一、四日 晴天 朝庄右衛門ニ被頼、代かきニ行、次右衛門之門ニ而、伝兵衛、彦五郎ニ逢、孫右衛門行、午ノ下刻申酉方ヨリ、大地震おひたしき事、近年希成事共也、我等家ノ下道動リ破、長サ七間程、其外、川東山々ノなぎ一同ニ方々崩、土煙四方ニたち見ゆる、同時ニ動止候、飯田町屋、土蔵等方々動崩申候、夜ニ入久右衛門ヘ行、夜之内ニ二度、夜明ニ一度、昼七つ時迄七度、都合五日之夜明迄十度也
- 一、五日 晴天 (中略) 七つ時御寺ヘ行、四つ時地震又夜五つ過迄曇、飯田町屋、五拾軒程、蔵八拾ヶ所程動崩之由聞
- 一、六日 晴天 (中略) 今日も忒度、動申し候、少つゝ成 (中略)
- 一、七日 朝五つ過迄曇 (中略)
- 一、八日 朝ヨリ少つゝ雨ふる (中略) 夜七つ地震する
- 一、九日 (中略) 夜ニ入久見ヘ行地震一度、今日晴天成
- 一、十日 晴天 (中略)
- 一、十一日 朝ヨリ雨ふる (中略)
- 一、十二日 晴天 (中略)
- 一、十三日 朝ヨリ曇 (中略) 地震一度
- 一、十四日 雨ふる (中略) 今日地震一度 (中略)
- 一、十五日 朝ヨリ日和烈し、午下刻ヨリ雨止 (中略)
- 一、十六日 晴天 (中略)
- 一、十七日 (中略)
- 一、十八日 朝ヨリ雨ふる (中略)
- 一、十九日 四つ過迄曇、雨ハふらす (中略)
- 一、廿日 晴天 (中略)
- 一、廿一日 (中略)

- 一、廿二日 朝ヨリ曇 (中略)
- 一、廿三日 晴天 (中略)
- 一、廿四日 晴天 (中略) 昨今地震する
- 一、廿五日 晴天 (中略)
- 一、廿六日 未明ヨリ雨少つゝふる、次第二強し、終日夜雨ふる (中略)
- 一、廿七日 朝ヨリ雨ふる (中略)
- 一、廿八日 晴天 (中略)
- 一、廿九日 晴天 (中略)
- 一、晦日 朝ヨリ曇、酉上刻ヨリ雨ふる (中略)

- 一、十一月大朔日己酉 晴天 (中略)
- 一、二日 晴天 (中略)
- 一、三日 晴天 (中略)
- 一、四日 晴天 (中略)
- 一、五日 朝ヨリ雨少つゝふる、風ふく (中略)
- 一、六日 晴天 (中略)
- 一、七日 晴天 (中略)
- 一、八日 晴天 (中略)
- 一、九日 晴天 (中略)
- 一、十日 朝ヨリ曇、雨ハふらず (中略)
- 一、十一日 晴天 (中略) 夜九つ時地震する (中略)
- 一、十二日 朝ヨリ少つゝ雨ふる (中略)
- 一、十三日 朝ヨリ曇 (中略)
- 一、十四日 晴天 (中略)
- 一、十五日 晴天 (中略)
- 一、十六日 晴天 (中略)
- 一、十七日 晴天 (中略)
- 一、十八日 晴天 (中略)
- 一、十九日 晴天 (中略)
- 一、廿日 晴天 (中略)
- 一、廿一日 晴天 (中略)
- 一、廿二日 夜明ヨリ雨止、晴天 (中略)
- 一、廿三日 晴天 (中略)

夜明方ニも地震、四つ時迄三度動、五つ過ヨリ未ノ刻迄、

辰ノ方何回ともなく山なり、雷のごとし、何之
鳴共定がたく、皆人肝をつぶし候、夜五つ時ヨリ又つよく
なり出、夜明迄なり申し候、世人不安心終夜臥表備
也、夜七つヨリ夜明ニいたり鳴止、夜ハ丸雪少つゝふる

一、廿四日 晴天 (中略) 夜五つ時地震する (中略) 夜九つ地震 (中略)

一、廿五日 晴天 (中略)

一、廿六日 晴天 (中略)

一、廿七日 晴天 (中略)

一、廿八日 (中略)

一、廿九日 晴天 (中略)

一、晦日 晴天 少曇 (中略)

一、十二月朔日己卯大 (中略)

一、二日 晴天 (中略)

一、三日 晴天 (中略)

一、四日 朝ヨリ曇寒し、雨雪ハふらず (中略)

一、五日 晴天 (中略)

一、六日 忽而寒し、雨雪ハふらず (中略)

一、七日 朝ヨリ少づゝ雪ふる (中略)

〔後略〕

史料3 外宮子良館日記

〔前略〕

(宝永四年 十月)

四日 晴 (中略)

午下刻地震 本宮別宮殿舎岩戸無恙廳舎少シ
傾東當館少シ脱壁板且轉柱根所納置御器御倉
之土器全ク無損失在棚上之土器モ亦無恙可謂奇
異也神領内民屋破損ス船江河崎山田ノ人屋悉ク損
失ス且土蔵或落壁土或顛倒ス上代者措不論覽文
壬寅五月朔地震ニ〈自壬寅年到當年四十六年〉今般地震強自
披壓死スル者亦有其後微少地震數度貴賤老若出
大道及夜亦然此日快晴

(頭注) 今度大地震同日同刻日本国中也前代未聞

御奉行長谷川周防守殿宮中檢方入自北御門
先御饌殿次ニ入自裏ノ御門正殿拝見〈一藁案内ニ藁并當番物忌皆出迎〉
次出玉串門前次別宮次出二鳥居入神庫
直ニ往内宮

(頭注) 甲州家四千軒潰二千軒半潰

彼國御師達禍出火版自甲州話也

五日 晴 三祢宜親彦御饌番不參

御奉行所ヨリ被仰渡候ハ御慎之内ニ候得共今度地震ニ付
取續候作事勝手次第ニ可仕候由被仰渡候
昼夜少宛地震

六日 晴 昼夜少宛地震 長官ヨリ廳舎ノ傾クナラス

七日 晴 南嶋古和浦御役所之衆參宮物語ニ古和浦二百餘家有

之處地震ニ付高潮大波ニ而人家海へ取て河原ニ成相揃所へ
役所も寺一字も在家ニ家斗も御利生有之不取敢參詣ト云々
方座浦同衆惣而嶋も大方如右

東海道御湯ニ宿し參宮人物語 彼邊之地震も當所ニ不相替云々

大坂ヨリ之參詣人物語 大地震大坂同前別而大和國夥敷口云々

大湊も高潮ニ而築地之人家海へ取行 戸羽夥敷焼失

江劬彦根當所と無替事大地震也云々

美濃大柿之近所竹カ鼻と云處之衆物語地震家潰れ大

道さけて泥出

紀笏和可山本町ヨリ之代参物語地震夥敷大地飛越程裂

泥出津浪参候而急二代参二参候 右何之方所も地震刻限同

今日 日ノ内ハ少宛地震 夜少宛二度

八日 晴 尼崎殿主土落角矢倉崩落北濱堀江之新地并道頓堀

〈高汐津波〉ニ来材木大船入込人多死

四称宜貞命御饌番不参之由申来

昼夜少宛地震

九日 晴 越前福井之衆々申候ハ福井ハ少斗之地震故口にも

罷出候

昼夜少宛地震

十日 晴 小林御奉行所江當館惣代参候書付如左

外宮子良館物忌惣代

敷原匠作

中西吉内

御宮御安全被為成御座候今度地震ニ付御安泰之御

祈祷仕御祓大麻指上申候此旨御次手之節御家老中様

迄可取継被仰上可被下候 以上

十月十日

小林ニ而宮司名代ニ而祓船上次外宮長官名代九称宜称宜惣代

七称宜十称宜物忌惣代右二人一同ニ御逢被成候皆々祈祷ニ而

静り可申被悦候との御事ニ候

長官ヨリ使明日周防守様御参宮ニ申候間左様ニ御心得可置候

十一日 曇 (中略)

十二日 晴

十三日 雨 (中略)

十四日 〈夜前戌刻小地震同子刻小地震〉 (中略)

十五日 (中略)

十六日 晴 及暮少地震

十七日 晴 (中略)

十八日 雨 昼夜

十九日 晴 (中略)

廿日 晴 (中略)

廿一日 晴 (中略)

廿二日 曇 入夜雨

廿三日 晴 (中略)

廿四日 晴 (中略)

廿五日 晴

廿六日 雨 (中略)

廿七日 霽

廿八日 晴 昨日宮奉行嶋藤十郎殿當館之前被通候

節當番物忌等申入口上去四日大地震之節

正殿之御階之初段 〱男柱有之一級之事〱南之方〱四五寸許

すさり申候此旨長官〱御申上可被下候依之今日小

工五六人来て半時許に繕之直之

廿九日 晴

卅日 曇 雨 (中略)

十一月大

朔日 晴 (中略)

昨日迄昼夜ノ内少々地震今日昼夜全無地震

二日 晴

三日 晴 (中略)

四日 晴 (中略)

五日 晴 (中略)

六日 晴

七日 晴

八日 晴 (中略)

九日 晴

十日 雨

十一日 晴 (中略)

十二日 晴

十三日 晴 (中略)

十四日 晴 (中略)

十五日 晴

十六日 晴

十七日 雨 (中略)

十八日 晴

十九日 晴

二十日 晴

廿一日 霽 夜雨 (中略)

廿二日 晴 旧冬當地大火事ニ付 御公義へ拜借之事御願ひ

申上相調候 大宮司へ金參拾両 祢宜十人へ金貳百両

春木大夫へ金五百両 山田常江金子壹万両御拜借相成候

亥之年ヨリ申年迄十ヶ年ニ上納仕候筈也然処ニ去十月大地震

方々破損依之向年ヨリ之上納御差延被下来三四月ニ上納

願口ニ小林奉行所迄御願申上候処江戸へ被仰上去月十一日ニ

御月番井上河内守様ヨリ當地新御奉行佐野豊前守様ニ御呼

被成被仰渡候へ如此之願其例も無之候得共伊勢へ格別之事ニ候はゞ

願之通相願候旨昨夕江戸ヨリ申来候由昨日小林ニ而被仰渡候

廿三日 晴

廿四日 晴 (中略)

廿五日 晴 (中略)

廿六日 晴

廿七日 晴 (中略)

廿八日 晴

廿九日 陰 (中略)

晦日 晴 陰 當月之内折々小地震

十二月大

朔日 晴 (中略)

二日 晴 物忌惣代担小林御役所獻御被

口上 外宮子良館物忌惣代

中西左兵衛

市場甚兵衛

内宮御安全被為成御座候頃日富士山之變異承知

仕候依之天下泰平殊ニ江戸表御静謐之御祈禱

御祓大麻差上申候此旨御席之衆御家老中様迄

可取繼被仰上可被下候 以上

十二月二日

河野喜平次殿御取次御逢被有候内宮衆外宮三四祢宜次

物忌二人一同ニ御逢被有候

神宮使中西木工大夫度會弘乘今日自江戸販物
語曰去ル廿二日江府ヲ出戸塚ニ一宿翌日藤澤ニ
至ル頃震動シ次第ニ強リ鳴テ石ヲ降ス〈其石焼テ甚輕シ〉茶店ニ
入テ暫ク窺見ニ往還ノ旅人其邊ノ男女驚キ
噪ク事甚シ漸ク小田原ニ着人民等資材雜具ヲ土藏
穴藏ニ入テ逃去リ其家ニ纒ニ一二人ヲ留置ク
震動ノ響ニ戸ハヅレ灯モ消電光モ亦甚シ砂降事
五寸許天明マデ震動不止此所ニ居テ落着ヲ見シ歟
先ヘ行テ遁レシ歟猶豫メ不決行テハ遁ル方アリト
箱根山ニ登ル東西晦冥更ニ咫尺モ不辨山ヲ
半腹登リ過レハ天氣清明ナリ然レ共震動ハ不止三
嶋旅店ニ着テ見レハ富士山〈半腹ヨリ上ノ方〉ヨリ火出テ其ノ
火ノハズニ里許空中ニ燃上ル或ハ五六間或ハ七八
間許ノ磐石火ノ中ニ上ル焼上ル磐ト下ル磐ト當テ
大ニ鳴テ碎ケ散ル日暮テ大地震又予ノ刻許ニ大地震
依之直ニ旅店ヲ出テ其日駿府ニ至リ宿ス此所ニテモ
震動甚シ前代未聞絶言語云云

按二人王五十代桓武天皇延曆十九年庚辰年

富士山自焼之由見歴史至今九百九年

(頭注) 貞觀六年七月富士山勿有暴火烧碎崗巒云々

自貞觀六年至寶永四年八百十三年

彼焼出ル穴後ニ見ルニ長サ三里許ハズ一里許其深サ不知ト也

関東ノ諸國焼灰降りテ田圃ヲ埋ム事絶言語

三日 晴 (中略)

四日 晴 (中略)

五日 晴 (中略)

六日 晴 (中略)

七日 晴 (中略)

八日 晴 自今日富士山火止申由後ニ承爰ニ記ス

九日 曇夜 雪降三四寸 (中略)

十日 晴 (中略)

十一日 小雪 後霽 (中略)

十二日 晴

十三日 晴

十四日 晴 (中略)

十五日 晴 (中略)

十六日 晴 (中略)

十七日 晴 (中略)

十八日 晴 (中略)

十九日 晴 (中略)

廿日 曇 (中略)

廿一日 雨 (中略)

廿二日 晴 (中略)

廿三日 晴

廿四日 (中略)

廿五日 晴 (中略)

廿六日 晴 夜雨

廿七日 晴 (中略)

廿八日 晴 (中略)

廿九日 晴 (中略)

〔後略〕

史料 4 蔵人日記

(表紙)

「宝永四丁亥歳七月ヨリ

同五戊子歳正月

日記

浦田蔵人

同六己丑歳正月ヨリ三月卅日迄

」

(前略)

十月

- 一、朔日 天晴 無別
- 一、二日 天晴 無別
- 一、三日 天晴 (中略)
- 一、四日 天晴 昼時分ヨリ太郎館へ参候処へ、八つ頃大地震、前代未聞、絶言語候
- 一、五日 天晴 昨夜中廿四五度地震ゆり申候、其内大き成三つ有之
- 一、六日 天晴 昨夜中十四度ゆり申候、其内夜明近二大き成二ツ、其内
夜明之地震おびたゞしき事、宇治中そらどう中／＼成事、
山田へら路ヨリ大分成事ニ承候、鳥羽湊なへ塩ゆり申候間、
死人おびたゞしき事也、毎日／＼ゆり申候事
- 一、七日 天晴 昨夜もゆり申候、今日も同前、少しづゝニ罷成候事 (中略)
- 一、八日 天 地震少しづゝ同前、 (中略)
津藤堂仁右衛門殿門つぶれ、十一とまへ米蔵不残
つぶれ申候由、御城之内大分御破損之由、芳々国々共ニ地震大分
ゆり申候由也 (中略)
- 一、九日 天 御礼御参宮仕候、墓にも仕候、地震昨夜三度も
- 一、十日 天晴 家来六人へ権八 甚八／＼伝四郎 伝助／＼森平 三助へ土取申候、日暮ヨリ雨
- 一、十一日 朝迄雨夜中共、昼頃天晴、土取甚八参候、今日堂長老大坂ヨリ御帰、
大坂地震なへ汐おびたゞしき様子、四日ノ日之地震ニ六日迄之死人
一万七千六百有余之由、慶光院屋しきヨリも飛脚到来、いまだ
様子知し不申候处、破損之様子申上候との事
- 一、十二日 天晴 森平来、味噌屋やゝ屋根取申候、大工来ル、夜ニ入テ
又地震つよくゆり申候、今日ハ切々ゆり申候事
- 一、十三日 昨夜ヨリ雨、今日も雨天 地震も少づゝゆり申候

- 一、十四日 昼迄雨、夜中つよし、昼ヨリ天晴 昨宵大地震一ツ、夜中大三度、
小ゆりも御座候、今日も同前二少づゝゆり申候、昨十三日玉串へ参候、百足屋善五郎殿
内片岡善兵衛殿美濃屋又兵衛殿菊屋四郎左衛門殿越後屋伝兵衛殿へ、地震
見廻、此方之事申入候（中略）昨夜中も地震有之
- 一、十五日 雨 八つ過ヨリ曇天ニ相成 地震少シ一ツ斗有之、殊ニ蒸申候
- 一、十六日 昨夜中ヨリ天晴、今朝猶以天晴（中略）
- 一、十七日 天晴 地震少しゆり申候
- 一、十八日 天曇 少し宛地震ゆり申候
- 一、十九日 雨 地震少しゆり申候（中略）
- 一、廿日 天曇 四つ過ヨリ天晴（中略）
- 一、廿一日 天晴（中略）
- 一、廿二日 天晴（中略）
- 一、廿三日 天晴（中略）
- 一、廿四日 天晴 無別
- 一、廿五日（中略）
- 一、廿六日 雨天 昨日迄も折々震申候（中略）
- 一、廿七日 天晴 少し震申候
- 一、廿八日 天晴 無別少し震申候
- 一、廿九日 天晴 かりややねかわらおき申候、震少シ
- 一、晦日 天雨（中略）

十一月

- 一、朔日 天晴 夕部酉時分余程震申候事、梅谷ヨリかりやへ
飛脚参候故、西尾山城守様へも地震御見廻状遣候（中略）
- 一、二日 天晴 無別
- 一、三日 天晴（中略）
- 一、四日 天晴（中略）
- 一、五日 天晴 日出ニ又々大震仕ル（中略）
- 一、六日 天晴（中略）
- 一、七日 天晴（中略）
- 一、八日 天晴（中略）
- 一、九日 天晴 夕部四ツ時又余程震申、人々
驚申候事（中略）

- 一、十日 雨 無別 (中略) 今日少震申候
- 一、十一日 天晴 (中略)
- 一、十二日 今日も地震、日暮ニハ又々
大震仕候事 (中略)
- 一、十三日 天晴 (中略) 地震そろ／＼震申候事
- 一、十四日 天晴 (中略) 地震余程ゆり申候事
- 一、十五日 天晴 (中略)
- 一、十六日 天晴 (中略) 未明少震
- 一、十七日 雨 (中略) 昼過ニ
天晴夜ニ入五つ前余程震申候 (中略)
- 一、十八日 天晴 (中略)
- 一、十九日 天晴 夕部も震申候 (中略)
- 一、廿日 天晴 (中略)
- 一、廿一日 天晴 (中略) 夕宵ニ少シ
西頃余程震申候事 (中略)
- 一、廿二日 天晴 無別
- 一、廿三日 天晴 (中略) 今夜も少し地震ゆり申候也
- 一、廿四日 天晴 (中略) 今宵も少西前余程ゆり申候
- 一、廿五日 天晴 (中略)
- 一、廿六日 天晴 (中略) 夜ニ入地震余程震申候事 (中略)
- 一、廿七日 天晴 (中略)
- 一、廿八日 天晴 (中略) 日暮ニ地震余程震申候
- 一、廿九日 天晴 (中略)
- 一、卅日 天晴 (中略) 富士山之下ノ方ゆりノ底ノ様成物出やけ申候よし、
將軍塚めいどう、津国中山多田社狐おどり申候歌
一、世ノ中ハ今年斗じやたゝくへ／＼ 後ハよか路にいせの国

十二月中

- 一、朔日 天晴 (中略)
 - 一、駿河富士山十一月廿三日ニ夜ヨリ大穴明申中ヨリやけ出
申候よし、夥敷様子也
- 一、二日 天晴 百足屋之御供東帰百足屋之代京発足、
及日暮松岡帯刀帰宅、江戸廿二日ニ立廿三日小田原ニ一宿候由、

外宮神宮使中西左太夫同道、小田原中二巻人も無之、津波
参候としてそう動仕候、其内女巻人有之家有之故、大河茂
上下共二一宿、夜二入夥敷光り物家なり仕、其後ハマナニ
砂ふり、又石共大分降申候由、漸夜明申候、箱根へむけて
登上仕候処ニ堂下へ参候へバ、晴天ニ相成、沼津地震無心元、
三嶋ニ大ニ人数一宿、夕飯時地震大分震申、門へ出申候、其後も
夜ノ四つ頃少し震、夜明前夥敷大地震、余程之家ニ有之候得共、
裏かハくづれ申候由、漸罷出、上下共怪我無之由、偕此大弁ハ
富士山足高山大分やけ申候、大き成火柱立申候、其故今様成事有之、
定而御江戸も左様可有之哉と物語候（中略）

今朝津を立申候、高茶屋ニ而も未夕富士の方やけ申候よし
（中略）

- 一、三日 天晴（中略）
- 一、四日 天晴（中略）
- 一、五日 天晴（中略）
- 一、六日 天晴 四ツ時善太夫江戸帰宅、前方松岡帰宅之節も
また大分砂ふり申候由、富士と足高山之間やけ申候由、
伝左衛門も道中ニ而逢申候由（中略）
- 一、七日 天晴れ 曉ニ地震ゆり申候（中略）
- 一、八日 天晴 無別夜ニ入余程地震ゆり申候
- 一、九日 天少し曇
- 一、十日 天晴 夕部五つ頃ヨリ雪降一十余つもる（中略）
- 一、十一日 曉ヨリ雪ニ三分降四つ頃ヨリ天晴 五ツ過地震ゆり申候（中略）
- 一、十二日 天晴（中略）
- 一、十三日 天晴（中略）
- 一、十四日 天晴（中略）
昨亥時分余程地震也
- 一、十五日 天晴（中略）
- 一、十六日 天晴（中略）
- 一、十七日 天晴（中略）
- 一、十八日 天晴（中略） 九つ前地震つゞきて両度震申候（中略）
- 一、十九日 天晴（中略）
- 一、廿日 未明雨少其後曇（中略）

- 一、廿一日 雨降 (中略)
- 一、廿二日 天晴 (中略)
- 一、廿三日 天晴 無別 (中略)
- 一、廿四日 天晴 夕部宵之内酉時分ヨリ余程地震ゆり申候
- 一、廿五日 天晴 如例 (中略)
- 一、廿六日 天曇 無別 (中略)
- 一、廿七日 天晴 如例 (中略)
- 一、廿八日 天晴 (中略)
- 一、廿九日 天晴 無別
- 一、卅日 天曇 (中略)

宝永五戊子ノ歳正月元日

(中略)

(一月)

- 一、廿二日 天晴 昼九つ前地震夥敷ゆり申候、先年十月四日之ヨリ少かるく御座候 (中略)
- 一、廿三日 天晴 (中略) 今日も地震余程ゆり申候事
- 一、廿四日 天晴 無別
- 一、廿五日 天 無別 (中略)
- 一、廿六日 天 無別 (中略)
- 一、廿七日 天 酉過ヨリ晴ル 夜明ニ地震、廿二日之地震ヨリ強ク震申候
- 一、廿八日 天 夕部四つ頃地震ゆり申候、夜中ヨリ雨
- 一、廿九日 雨
- 一、卅日 天晴 (中略)

壬正月

(中略)

(閏一月)

- 一、十二日 天晴 夕部酉前地震余程ゆり申候 (中略)
- 一、十三日 天 (中略) 夕部も地震有 (中略)
- 一、十四日 天 (中略)
- 一、十五日 天曇 (中略)
- 一、十六日 天 (中略)

- 一、十七日 天 (中略)
- 一、十八日 天 地震少ゆり申候 (中略)
- 一、十九日 天 無別 (中略)
- 一、廿日 天 (中略)
- 一、廿一日 雨 (中略)
- 一、廿二日 天晴 (中略)
- 一、廿三日 天曇 (中略)
- 一、廿四日 天 (中略)
- 一、廿五日 天曇 (中略)
- 一、廿六日 天晴 (中略)
- 一、廿七日 天 朝五ツ時地震夥敷ゆり、先月廿二日ヨリ余程長ク
ゆり申候事 (中略)
- 一、廿八日 天晴 無別 (中略)
- 一、廿九日 昨夜半過ヨリ雨降 (中略)

二月

(中略)

(二月)

- 一、廿六日 朝曇 夕部夜ル八つ頃地震余程ゆり申候 (中略)
- 一、廿七日 雨夜ニ入天晴 (中略)
- 一、廿八日 天 (中略)
- 一、廿九日 天 (中略) 地震少づゝ震申候
- 一、卅日 曇天晴 (中略)

三月中

(中略)

(三月)

- 一、廿日 天晴 (中略) 夕部酉時分地震夥敷ゆり申候事
一日曇、夕方雨
- 一、廿一日 雨 (中略)
- 一、廿二日 天
- 一、廿三日 雨
- 一、廿四日 天晴 (中略)

一、廿五日 天 (中略)

一、廿六日 天 (中略)

一、廿七日 天 (中略)

昼時分地震、今日少シ御座候、三度ゆり申候 (中略)

一、廿八日 天 (中略)

一、廿九日 天 (中略)

四月中

(中略)

(四月)

一、三日 雨 地震少シゆり申候事 (中略)

(中略)

五月

(中略)

(五月)

一、十七日 天 昼之内少シ曇地震ゆり申候、夕部も一昨夜もユリ申候処、
承候事 (中略)

一、十八日 天晴

一、十九日 天 (中略)

一、廿日 天 (中略)

一、廿一日 雨 (中略)

一、廿二日 雨 五つ過地震、大能天晴又七つ時分天夕立、日暮ヨリ晴 (中略)

(後略)